

業務改善総長賞受賞

IPMUの事務部門教職員4名のワーキンググループ（代表：小澤みどり 国際交流係長）が、「柏キャンパス外国人研究者受入促進Webサイト」を立ち上げた成果により、東京大学の2008年度業務改善「総長賞」を受賞しました。

IPMUでは外国籍研究者を多く受け入れています。日本滞在に関する外国人向け英語サイトの大半が旅行者向けだったこと、日常生活に必要な情報が不足していたことにより、着任前の外国籍研究者からの多数の問い合わせに個別に対応せざるを得ませんでした。そこで、IPMUのWebサイト上に日本の生活に関する多様な情報を掲載したことで、来日する研究者の不安を取り除く一助となったほか、問い合わせ件数も減り、業務の効率化に成功しました。



2008年12月19日（金）に東京大学安田講堂で行われた表彰式で、総長から表彰を受けました。

IPMU一般講演会 「宇宙に終わりはあるか」

2009年1月24日、東京大学本郷キ



懇談会で参加者と懇談する機構長

ャンパス内の弥生講堂一条ホールにおいて、一般講演会「宇宙に終わりはあるか」が開催されました。事前申込は締切日を待たずに満席となり、先着300名の参加者が会場を訪れました。

村山機構長の講演と質疑応答ののち、機構長と参加者の懇談を行いました。お茶とお菓子を囲んだ和やかな雰囲気の中、参加者から機構長へ宇宙に関する多くの質問が寄せられました。

多摩六都科学館サイエンスカフェ 「宇宙」

2009年2月14日—3月14日の毎週土曜日、東京都西東京市にある多摩六都科学館で、IPMUと同科学館の共催による「サイエンスカフェ『宇宙』」が開催されています。IPMU主任研究員5名（杉山直・佐藤勝彦・井上邦雄・村山斉・大栗博司）が各回を受け持ち、宇宙の始まり・進化、そして未来を、一般の方向けに分かりやすく解説しています。参加者との交流を重視する企画で、講演、質疑応答の後、参加者は和やかな雰囲気の中で講師との懇談を楽しんでいます。事前申込と当日受付を併せ、毎回100名の参加者がこのサイエンスカフェを訪れています。



サイエンスカフェ「宇宙」の会場のようす

IPMU中畑雅行主任研究員、 平成20年度井上學術賞を受賞

東京大学宇宙線研究所の教授でIPMUの主任研究員を兼ねる中畑雅行氏が「太陽ニュートリノの観測とニュートリノ振動の研究」により平成20年度第25回井上學術賞を受賞しました。中畑氏は大型水チェレンコフ型ニュートリノ検出器を使ったカミオカンデ、スーパーカミオカンデという2世代の実験の第一線で太陽ニュートリノの研究に従事しました。その優れた実験手腕によりニュートリノ研究と素粒子物理学に多大な貢献をした功績を評価されたものです。井上學術賞の贈呈式は2009年2月4日に行われました。

IPMU井上邦雄主任研究員、 第5回日本學術振興会賞受賞

2009年1月30日に日本學術振興会から、東北大学ニュートリノ科学研究センター長でIPMUの主任研究員を兼ねる井上邦雄氏が平成20年度第5回日本學術振興会賞受賞者に決定したことが発表されました。受賞理由は、発電用原子炉で生成される反電子ニュートリノを測定するカムランド計画を現場で主導し、ニュートリノの数がニュートリノのエネルギーと共に増減することを、世界で初めて実証した功績「原子炉を用いたニュートリノ振動の精密測定」です。受賞式は2009年3月9日に行われました。

IPMU杉山直主任研究員、 2008年度日本天文学会 林忠二郎賞受賞

2009年1月31日に名古屋大学理学研究科教授でIPMUの主任研究員を兼ねる杉山直氏が「宇宙マイクロ波背景放射に関する理論的研究」により2008年度日本天文学会林忠二郎賞受賞者に決定したことが発表されました。膨張宇宙での密度・温度揺らぎの時間発展を数値的に解き、宇宙マイクロ波背景放射の温度揺らぎの詳細かつ

精密な理論的予想を得、また、生成の物理素過程を明らかにし、温度揺らぎの空間パターンが宇宙の空間曲率などの宇宙論パラメータにどのように依存するかについて明快な説明を与えた功績が評価されました。受賞式は3月25日の2009年春季年会中の通常総会において行われました。

WPIプログラムの現地視察

2008年12月9日と10日の2日間にわたり、第2回の現地視察が行われました。WPI全体のプログラムディレクター (PD)、黒木登志夫氏、IPMU担当プログラムオフィサー (PO) の三田一郎氏、5名のIPMU担当作業部会委員全員 (広中平祐、釜江常好、川合光、John Peacock、Matthias Staudacherの各氏)、文部科学省からWPIプログラム担当の岡谷重雄科学技術・学術戦略官、その他の視察団が柏キャンパスを訪れ、IPMUでの研究者の集結と研究の状況など、世界トップレベル研究拠点の形成に向けての進捗状況を視察しました。現地視察の結果は、2009年3月17日に開催されるWPIのフォローアップ委員会に評価資料として報告されました。



現地視察

神岡サテライト研究棟完成

2009年2月18日に神岡サテライト研究棟が完成しました。2階建て、約500m²の建物で、今後はこの研究棟でニュートリノの研究で知られるスーパーカミオカンデとKamLAND、ダークマターの検出を目指すXMASSの研究

が進められます。



神岡サテライト研究棟の外観

IPMU研究棟着工

IPMUの新研究棟の建設工事が2009年2月9日に正式に開始されました。5階建て、約6,000m²の研究棟で、内部には広い交流スペースが設けられます。建物のコンセプトは、カリフォルニア大学サンタバーバラ校にあるカブリ理論物理学研究所、カリフォルニア大学パークレー校の理論物理学センターなど、代表的な理論研究所のもつ、明るく大きなオープンエリアや研究のための設備を備えたスタイルを受け継いでいます。世界各地から訪れる研究者に魅力的な研究環境を提供することが期待されており、2009年中の完成・入居を目指しています。



研究棟の工事のようす

研究会報告

2009年1月4日—9日の6日間、IPMUにおいて「ワークショップ：複素幾何学における超対称性」が開催されました。このワークショップでは、一般化されたケーラー構造などについての最近の発展に焦点をあて、数学者・物理学

者双方が参加して議論が行われました。

今後の研究会 ——フォーカスウィーク :宇宙論における非ガウス性

2009年4月6日—10日の5日間、東京大学柏キャンパス図書館メディアホールにて「フォーカスウィーク：宇宙論における非ガウス性」が開催されます。

なぜ宇宙はこれだけ大きいのか？ 銀河などの宇宙の構造はどうやって生まれたのか？ これらの素朴な疑問の本質的な部分に答えてくれるのが、インフレーション宇宙理論です。近年の観測の進展により、インフレーション理論の予言はかなりの精度で確かめられていますが、この理論には多くの模型が存在することも事実です。それらの理論模型を観測的に識別することが急務であり、そのために有効であると考えられているのが揺らぎの非ガウス性です。宇宙背景輻射や宇宙の大規模構造の観測からの非ガウス性への制限、非ガウス性が顕著なインフレーション模型の構築など、様々な課題があり、これらの研究課題について、第一線で活躍する研究者を集めて新しい進展を目指すのが、本フォーカスウィークの目的です。

人事異動 転出

IPMU博士研究員の和南城伸也さんが、ミュンヘン工科大学客員研究員に転出されました。IPMUの滞在期間は2008年4月16日から2009年3月6日でした。今後のご活躍とご健康をお祈りします。

訂正

IPMU News No.4に、下記の通り訂正があります。(Web版では訂正済みです。) p.34 第2コラム (右端) 23行目、「母方の祖父」を「母方の祖父母」に訂正 p.36 第3コラムの下から18行目、「一連の」を削除